

第3節 甲州街道沿いの町並みと建築

1. 勝沼宿の成立と発展

勝沼宿の誕生は、元和4年（1618）の甲州街道における新規宿駅の制定とされる。勝沼宿は、甲府盆地の東玄関口であり、江戸日本橋から31里26町、宿場の長さは16町26間（約1,745 m）であった。天保14年（1843）には家屋192軒、本陣1軒、脇本陣2軒、旅籠屋23軒があり、多くの物資が集散する中心地としてにぎわいが記される。

近世後期には、甲州八珍菓（江戸時代に甲斐国の代表的な8種類の果物を総称したもの。）（第4章第1節参照）がもてはやされ、甲州ブドウは宿場を活かし、江戸市場に直結し名声をあげた。ただし、この時代の主産物は米や麦で、ブドウ畑の割合は僅かであった。

近代に入り、宿駅制度が廃止され、近世の伝馬・助郷の精度は廃れ、新たな陸運組織が設立され、活性化した交通便は更なる経済活動を促した。しかし、明治36年（1903）に中央線開通して以来、急峻な山々の影響で配線されなかった勝沼宿周辺は徐々に衰退していった。

勝沼宿の商圈は新興の塩山地域に奪われ、商店や旅籠は姿を消していった。大正2年（1913）に勝沼駅が設置されたが、勝沼宿との距離は遠く、かつての繁栄を取り戻すことはかなわなかった。とはいえ、商況は好転し、地域物産の小集散地となった。それまで人や馬によって輸送されていた作物が大量に運ばれるようになり、農業への転換も多くみられ、他の地域と同様に養蚕や畑作の増加が著しくみられた。

また、近代化に伴い、ワイン醸造用としてのブドウの需要増大、戦時中にはワインやブドウの葉から抽出される酒石酸が潜水艦の水中聴音機に利用できることから増産された。戦後も高度経済成長期に果実の需要が増大したことから、ブドウの栽培面積は伸び続けた。その後、減少傾向にあるが、現在でも有数のブドウ産地として有名である。

2. 勝沼宿の区間と区画

ここでは『勝沼町誌』や「甲州道中宿村大概帳」及び勝沼宿史料、調査対象家屋でのヒアリング調査より、勝沼宿の区間と区画を整理する。「甲州道中宿村大概帳」より、勝沼宿は勝沼村単一で構成されており、区間としては、柏尾村境より等々力村境までということがわかる¹⁾。明治期の和紙公図より、勝沼宿には小字があり、図43のような配置になっている。この小字は、江戸後期以来のものであり、その変遷を図42に記す。

勝沼宿の本陣は上町、脇本陣は上町、本町に配置されていた。勝沼宿の本陣はその屋号を池田屋、脇本陣のひとつは下池田屋といった。下池田屋は池田屋の分家であり、本陣に相当する規模であったとわかる²⁾。また、「旅籠屋式拾三軒 内 大五軒 中七軒 小拾壹軒」というのは、本陣と脇本陣を除いた旅宿であり、坂本家記録よりそのうち大規模旅籠屋は本陣、脇本陣の付近にあり、他の13軒は小規模旅籠屋で木賃宿であることが分かった³⁾。

勝沼宿では上町、仲町、本町が特に商家の多い地域あると考えられる。すなわち、勝沼宿内でも地域によって商家や農家の数が異なり、町並みの景観に違いがあるということが推測できる。

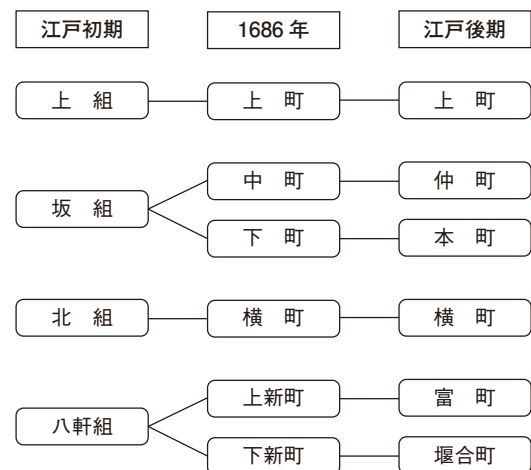


図42 勝沼宿の小字変遷

3. 甲州街道沿いの 歴史的建造物

現在の甲州街道沿いの建造物を把握するため、悉皆調査をおこなった。悉皆調査では、甲州街道沿いに現存する建物の目視調査をおこない、歴史的建造物の分布状況、各建物の推定年代、構造、正面形式、屋根形式、屋根材、屋敷構えなどを記録した。結果、104件の建物を歴史的建造物の対象とした。この分布を図43に示す。

(1) 建物種別による分類

甲州街道沿いに建つ歴史的建造物は、以下のよう
に分類できる。

- ・神社 2件
- ・主屋 61件
- ・土蔵 31件
- ・付属屋 3件
- ・店舗 4件
- ・その他 3件

主屋は、木造2階建、切妻屋根、屋根材は桧瓦葺を用い、正面方向を平入りとし、出桁造とするものが多くみられた。また主屋の側面を土蔵造にするものがみられた。

近世の屋敷配置を引き継ぐ景観として、甲州街道に対して妻面を接道した土蔵、平を接道した主屋を配置した屋敷構えがみられる。

(2) 形式による分類

勝沼宿の民家の平面形式は、町家型と農家型の

2つに分類できる。

i) 町家型の民家（商家、旅籠）

上町、仲町、本町、富町の建物は、共通して前土間及び通り土間をもつ町家型の平面形式である。これは、間口が狭く桁行が長い地割であること、街道に面することと関係する。基本的には街道側よりミセ、イマ、ザシキと3室並ぶ1列3室が基本ではあるが、萩原家住宅（仲松屋）のように2列3室の配置もみられる。

なかでも、商家や旅籠は、街道側を接客空間として、敷地奥を生活空間として使用する。主屋の裏手には、土蔵や蔵座敷、風呂屋などの附属建物並び、そのあいだには坪庭が設けられている。

○萩原家住宅（仲松屋）（図44～46）

仲町にあり、東屋敷と西屋敷の2軒分の敷地をもつ。当初は東側のみだったが西側も買入れ、現在の屋敷構えとなった。街道南側に北面して東から東蔵、東店舗兼主屋、西店舗と並び、勝沼宿を代表する景観を保持している。敷地奥にブドウ畑を有していたが、農業に関しては古い記録がない。

東店舗兼主屋

木造2階建、平入の切妻造鋼板葺屋根で、南側に台所、居間などが平屋で取り付く。平面構成は、正面左（東側）に出入口があり、土間がL字に配されている。出入口から南へ伸びる土間は幅1間半の通り土間で、土間に接して和室2部屋が南へ3列並んでいる。正面の2部屋は、ミセ、バントウベヤと呼ばれる。土間とミセとの仕切りには引



図43 調査対象範囲の甲州街道沿いの歴史的建造物・小字の分布

き上げ式の板戸が備えられている。板戸を垂れ壁の上に引き上げ、柱が垂れ壁の下で取り外せるようになっているためミセが接客空間として土間に面して開放できる。また通り土間には跳ね上げ式の大戸と引き上げ式の格子戸が備えられている。パントウベヤの奥にはキンコノマという部屋があり、質業を営んだ名残として金庫を設置していた場所に石の基礎が残されている。また、ミセからチャノマへ続く中廊下状の通路があり、商いを営む間取りの造り方として興味深い。南西にあるザシキには仏間、床の間、付書院が備えられている。イマとダイドコロは昭和45年（1970）にリフォームされている。チャノマから西座敷に繋がる渡り廊下がかかる。2階は現在部屋としては使用されていない。

東蔵

東蔵は、主屋の東側に位置し、街道に対して妻面を向けている。土蔵造2階建、棧瓦葺屋根で、小屋組は和小屋で二重梁となっている。下屋を東座敷側（西側）へ1間半出し東店舗兼主屋と繋がっている。平面構成は、蔵座敷の形態で、1階は

12畳半の和室が2部屋あり、それぞれ下屋からの出入り口がある。また、東蔵の南側には渡り廊下を通して別棟に便所と浴室が備えられており、蔵の南面に出入り口を設けている。出入り口は観音開きの蔵戸となっており、加えて室内側に大戸と障子戸がある。床は畳敷き、天井は重梁で南側の和室には床の間と書院が備えられている。2階は板張りの床で、釘は洋釘が使用されている。重要な客人を接待するための建物として専用の水廻りが設けられ、階段が襖で隠されており、下屋の土間及び勾配天井が漆喰で塗りこめられているなど客人に配慮した造りとなっている。

西屋敷は、西店舗と西座敷を別棟とし、中庭を挟んで西座敷の背後に西蔵（蔵座敷）があり、平行に配置する独特な屋敷構えを取っている。

西店舗

西店舗は、東店舗兼主屋と同様に街道に面して平入で、木造2階建、切妻造棧瓦葺屋根とし、妻面を大壁造としている。平面構成は、正面にミセが配され、その背後に通り土間、板敷きの部屋、坪庭がある。ミセは土間（現状はコンクリート叩



図44 萩原家住宅（仲松屋）（東から）



図45 萩原家住宅（仲松屋）（西から）

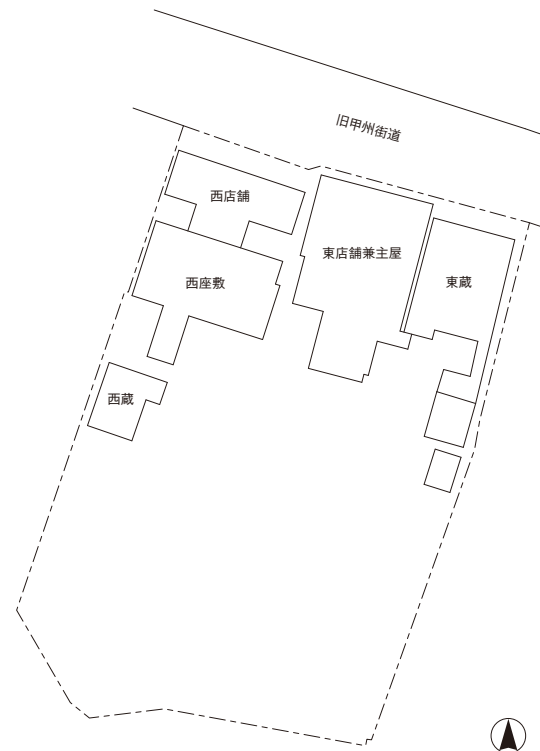


図46 萩原家住宅（仲松屋）配置図（1:800）

きの土間)部分と板張りの2部屋に分かれており、土間のミセは正面に跳ね上げ式の大戸と、引き上げ式の板戸が備えられ、それぞれ面格子が付いている。当初はミセの間の間仕切りは設けられていなかったが、平成24年(2012)の改修工事で間仕切りの建具を新設し、床の張替え、建具の入れ替えなどがおこなわれている。2階は東西に3室並び、西寄りの2部屋は畳敷きの和室、東側の居室は板張りとなっている。平成24年(2012)の改修以前は3室すべて板張りの居室であった。

西座敷

西座敷は、木造平屋建、切妻造棧瓦葺屋根とし、西店舗同様に妻面を大壁造としている。通り土間の東側に便所、浴室があり、廊下を隔てて居室が2部屋並ぶ。通り土間の西側に幅1間の廊下があり、8畳の和室が南北に2部屋南北に並ぶ。南のザシキには床の間と書院が備えられている。西座敷の背後には西蔵があり、西蔵のあいだにクジョウマが取り付け繋がっている。クジョウマは畳敷き、棹縁天井で、床の間と付書院を備えている。長押の省略や小規模な床の間と付書院など、数寄屋造りの特徴をもっている。

西蔵

西蔵は、西座敷の南側に位置し、クジョウマで西座敷と繋がっている。蔵座敷の形式をとった土蔵造2階建、棧瓦葺屋根の建物で、墨書より明治13年(1880)の建築と確認される。平面構成は、1階が14畳の和室で1間半の床の間と半間の書院(地袋及び天袋あり)を備えている。北及び東面に観音開きの蔵戸を設け、常時の出入りは北面を利用し、東面は庭園を眺めるための開口として、その出入りに利用している。南東面に下屋を廻し、

北東側に便所も備えている(かつては浴室もあった)。2階は板張りの床で、釘は和釘が使用されている。重要な客人を接待するための建物として専用の水廻りが設けられ、階段が襖で隠されている点や下屋の土間及び勾配天井が漆喰で塗りこめられている点など東蔵同様、客人に配慮した造りとなっている。

ii) 町家型の民家(農家)

町家型の農家は、旅籠や商家と比較すると前土間の面積が大きい。これは、作物の作業のためであると考えられる。後述するが、果樹の出荷作業は居間と土間を中心におこなわれる。町家型の農家の代表例である勝沼園に関しても土間が広く、土間部分にブドウ関連の道具を置くなど、接客空間よりも作業場としての色が強いと考えられる。

○斉藤家住宅(図47～48)

富町にあり、街道の北側に南面して屋敷を構える。主屋の奥(北側)には平成に新築した住居が続く。ブドウ農家だが敷地内にブドウ棚はなく、離れたところに農園をもつ。

主屋は、明治後期に建てられたとされる。街道に面した平入りの木造2階建、切妻造棧瓦葺の建物である。平面構成は、正面右(東側)に出入口があり、土間がL字型に配されている。正面の東西に幅1間の前土間がある。出入口から北に伸びる幅1間の土間は、かつては通り土間であった。通り土間の左(西側)には8畳ほどの部屋が3部屋続く。手前(南側)からイタマ、イマ、ザシキとよばれており、ミセの右(東側)には荷詰めなどに使われた板間がある。ミセでは板間と同様に出荷作業をおこなっており、その他接客空間としても使われていた。イマには仏間、ザシキには床



図47 斉藤家住宅 旧主屋 正面



図48 斉藤家住宅 旧主屋(南東から)

の間が備えられている。イマの仏間横の天井は昭和46年（1971）6月に改修しており、その時に壁を窓に変えた。ミセ、イマ、ザシキの3部屋は障子で区切られており、適宜取り外して宴会に使われた。2階は南側に幅半間の廊下が続き、廊下に面して10畳ほどの部屋が2部屋続く。また、昭和30年（1955）頃に起きた隣家の火災が燃え移って以来、西側の壁厚を30cmに増やし、土蔵造のようにした。建具は、勝沼周辺の建具屋のヤマモトゲンパチ氏に依頼したものである。

iii) 農家型の民家

堰合、等々力には、農家型の平面形式の建物がみられる。平面形式は、入口の奥に土間が広がり、田の字型の間取りに縁が回る。土間に近いところから居間、座敷また勝手、納戸となる。果樹の出荷作業は居間と土間を中心におこなわれていた。

町家型に対して、奥行方向の増築がみられないのは、地割より比較的に広く間口がとれたこと、住まいとして十分な大きさがあったからと考えられる。

農家型の平面形式は、近隣の菱山地区にも類似してみられる。しかし、菱山地区の民家と堰合、等々力の民家が決定的に違うことは、堰合、等々力は甲州街道に面し、勝沼宿に連なる地域であったことから、勝沼宿と同じように町家のような立

面、土蔵配置がみられることである。

等々力の代表的な農家である芳王園主屋には、養蚕に使われていた形跡がある。これは、等々力の主力がブドウ栽培でなく、養蚕や稲作であったことに由来する。

○佐藤家住宅（芳王園）（図49～54）

現在は、芳王園という観光ブドウ園を営んでいるが、もともとは米の農家であった。その後養蚕をはじめ、昭和中期にブドウ栽培を加え、戦後には完全にブドウ農家へと転換した。

旧主屋

旧主屋は曳家されたものであり、昭和16年（1941）に観光ブドウ園のためにブドウ棚を設置し、甲州街道に面していた旧主屋建物を現在の位置に移した（図49、50参照）。昭和44年（1969）に解体して現存しないが、主屋には土間があり、荷馬車をつけて荷を運び入れていた。もともとは養蚕のための突き上げ越屋根があり、隣家の大村家主屋を模したものであったという。

図54の古写真やヒアリングをもとに考察すると、移築する前の旧主屋は街道南側に北面して建つ平入りの木造2階建、切妻造棧瓦葺屋根の建物であった。平面構成は、北面（街道側）の西角に玄関、南へ伸びる通り土間があり、通り土間から



図49 佐藤家住宅（芳王園）配置図（1:800）

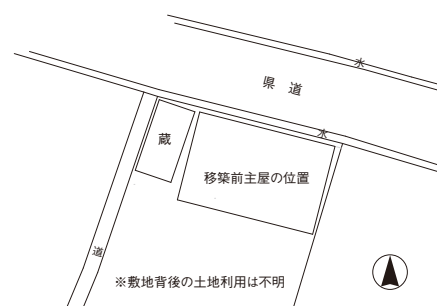


図50 佐藤家住宅（芳王園）復原配置図（1:800）



図51 佐藤家住宅（芳王園）

2列に3部屋続く。手前（北側）は、西から和室、ナカノマ、オクザシキ、奥（南側）はイマ、インキョ（ナンド）、ナンドと続く。オクザシキにはトコの痕跡がみられ、トコ柱が腰高さで切れており、ちんくぐりになっている。オクザシキの奥（東側）にあった仏間が、現在イマの奥（南東側）に移され、またイマの奥（南西側）にはかつて台所があった。部屋の北側には廊下が続く。2階はほとんどが改装されており、部屋の配置は確認できないが、養蚕の形跡がみえる箇所もある。

土蔵

街道に面して建つ土蔵のほか、新築主屋の位置には以前は土蔵があり、計2棟の土蔵が南北に連



図 52 佐藤家住宅（芳王園）主屋（現状）



図 53 佐藤家住宅（芳王園）土蔵



図 54 佐藤家住宅（芳王園）主屋 古写真

なっていた。2棟の土蔵は、質蔵、農業用具の物置として使われていた。

（3）地区（小字による分類）

東側には昭和中期ごろ建てられたとされる看板建築の店舗が多く存在し、多くのものが商店を営んでいた。西側（等々力村地域）には、前庭を設ける民家が複数存在している。

表2は江戸後期の小字に分けて調査結果をまとめたものである。

歴史的建造物の現存状況として、街道の長さに対して、仲町には多くの歴史的建造物が密集して残されていることがわかる。また甲州街道からみた方角で分類すると、どの地域でもあまり南北で数の差はみられない。

上町と富町では、ミセの中でも店舗として使われている看板建築が多くみられた。対して、仲町では、ミセが多く現存するが、看板建築はみられず、町家としての景観が目立つ。また、仲町は土蔵が他地域に比べて多く現存していることがわかる。

4. 勝沼宿の民家の平面形式と町並みの変遷に関する考察

勝沼宿の民家の使われ方の変遷は図59のように考えられる。

近世から近代にかけて大きく変化した勝沼宿一帯は、宿駅発足以前には仏閣の参詣道として、また戦国時代には軍道として使われていた。江戸時代に入ると、店舗をもたない商人が月に数回市場

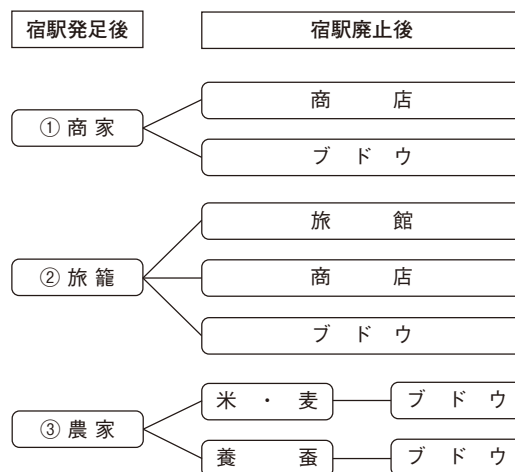


図 55 勝沼宿の民家の変遷

を開く市場町となり、元和4年（1618）に甲州街道の新規宿駅として勝沼宿が誕生し、本陣を含む旅籠が複数設置された。元和5年（1619）の勝沼村上町の古絵図より、上町周辺は街道沿いに家々が連なっていたことがわかる。その後緩やかに発展していき、寛文12年（1672）頃から市場や市日が定められ、宿場町として急速に発展していった。発展するにつれ定住する商人が増え、現在のようない町並が形成されたものと考えられる。

近代の初期における勝沼宿の民家は、機能により旅籠、商家、農家に大別できる。江戸時代から近代の変遷は、以下に記す。

（1）旅籠（本陣、脇本陣含む休泊施設）

勝沼宿には本陣1軒、脇本陣1軒、旅籠屋23軒の宿泊施設があった。本陣の周囲には問屋場があった。貞享年間の記録より、この宿の生活様式は、基本的には農村的なものであった。町場ではあったが「農業之外旅籠屋ハ旅人の休泊を請又ハ食物を商ふ茶店有之其外商人有之」とあるように、あくまでも農業が主であった。そのほか「此宿男ハ山稼をいたし女ハ木綿紵を取又絹紵を織る夏之内蚕をもいたす其外仕馴たる手業なし」とあるように、一般に附近農村と生活様式においては違いはなかったようである。

一方、貞享元年（1684）には宿泊施設が酒造をはじめするなど、宿泊施設としての機能だけではなく、他の用途の参入がみられる。しかし、正徳元年（1711）時点では旅籠屋業よりも農業が先行していたという記録もあり、形式的には旅籠であるが、全体としては農家の色が強かったと考えられる。

明治期に入り、第4節からわかるとおり、酒造だけでなく茶屋や商店のような機能もみえはじめ

る。宿場町から物流の場としての役割が大きくなり、宿泊施設としての需要が少なくなり、商家、商店としての役割が増加した。

（2）商家（茶屋も含む）

旅籠の周辺施設として、勝沼宿には多くの商家や商店があった。近代の商家、商店の発展は前述したとおりであるが、昭和に入り戦争がはじまると、商業者は物資の欠乏と配給制度の強化によって商業活動が阻害され、休業に至った商店も多かった。昭和35年度の商業調査によると、過半数の商店は戦後開設されたものであり、江戸時代から続く商店は2軒のみとわかる。商家、商店では職種を変えたところも多かったが、ブドウ産業の発展によりブドウ関連の業へ転換したところも多かったと考えられる。

（3）農家

勝沼宿の作物は、江戸時代から明治初期にかけては養蚕、米、麦が主力であった。山梨県では全体的に養蚕、製糸業が盛んであり、勝沼宿一帯もそのうちのひとつであった。

そのほか江戸初期にあつては養蚕としての桑以外にも漆を、中期から以後には稲・粟・稗・大豆などの普通農作物の他に、たばこ・木綿・茶などをつくり、また村によっては枝柿・生栗・青梨子などの果樹若干を栽培するなど、雑穀や野菜以外に江戸市場などに結びつく貨幣収入の手段を早くから構っていたのであつた⁴⁾。

とあるように、江戸市場の需要を考えた農業展開をしており、これはブドウ産業が拡大したことの理由の一つと考えられる。明治中期ごろからブド

表2 調査対象の建物

小字	長さ	方角*	軒数	計	接道	計	土蔵
上町	約 700m	北	14	25	4	11	1
		南	11		7		0
仲町	約 280m	北	10	22	2	11	2
		南	12		9		3
本町	約 260m	北	6	14	2	7	0
		南	8		5		0
富町	約 500m	北	14	24	10	15	1
		南	10		5		0
堰合	約 220m	北	4	8	2	4	0
		南	4		2		2
等々力村 宮脇・古町屋		北	3	11			
		南	8				

※ 方角：甲州街道からみた方角

ウ産業が発達して、昭和中期には作物はほぼブドウ一色になった。現在では、農地はブドウ畑が大半を占めている。

(4) 地形と地域としてのまとめ

明治時代に本町、仲町、上町に商家や旅籠がまとまっており、昭和時代も本町から上町にかけて、商店がまとまっていることがわかる。これは、勝沼宿の地形に由来すると考えられる。本町より東は、高低差が大きく、段丘崖があることで奥行方向の長さが十分にとれない。とくに本町から上町の南側は背後に日川がせまり、作物を育てるにあたって不向きである。よって、この地域に勝沼宿の本陣が構えられ、多くの宿泊施設が集まったと考えられる。昭和期においても多くの小売業がみられ、現在でも業種を変えつつも商店が多くみられる。一方勝沼宿の西側は、高低差が少なく、緩やかな地形である。このことから、奥行方向に長いブドウ畑を有することで、観光ブドウ園の売店、駐車場、ブドウ畑までをひとつの敷地内で完結させることが可能である。上町の東部は、北側に段丘崖が広がるが、南側は緩やかな地形がみられ、ブドウ畑が広がる。

したがって、勝沼宿の建物は、本町から上町の旅籠屋、商家が集まり、堰合、富町、上町の東部に農家が広がるといえる。

(5) 勝沼宿における

近世から近代にかけての町並みの変化

勝沼宿は宿駅制度を受けて、宿場町としての町家の景観を生みだした。主屋は木造2階建、平入り、切妻造棧瓦葺き、出桁造を基本とし、主屋の横に妻側を街道に向けた2階または3階建の土蔵を配する家々が多かったと考えられる。



図 56 古寿園（平成 31 年）

勝沼宿の町家の景観は主屋や土蔵が接道することで構成されており、建物の奥には水田や桑畑が広がっていた。その後、明治初期～中期にかけて徐々にブドウ畑が広がりはじめ、明治後期には街道周辺は水田が減り、ブドウ畑と桑畑が目立つようになった。大正期に入り、観光ブドウ園が登場することで、芳王園のように主屋を敷地奥に移す行為が勝沼宿内で数軒みられる。中でも、佐藤家住宅（芳王園）と同じく観光ブドウ園の先駆けとなった古寿園では、近隣の土地、建物を買取り曳家などで大幅な敷地内の改造をおこなった。観光バスなどの大型車両も駐車可能な駐車場を設置するなど街道からの利便性を考えた配置換えをおこなっている。次第に街道一帯も街道に面してブドウ棚の設置をし、街道から自動車へのアプローチに重点を置くようになった。その結果、現在は勝沼宿一帯はブドウ畑一色となり、街道沿いにもブドウ棚が目立ち、町家とブドウ棚の混在が景観として残った。

5. まとめ

現在の勝沼宿は、明治から昭和にかけて建てられた歴史的建造物とブドウ畑が連なる。宿場町からブドウ産業への転換が勝沼宿の近代以降の特筆される点である。街道に面した町家と土蔵が勝沼宿としての基本の町並みを形成した。そこにブドウ産業が加わることで、ブドウ畑の広がりが景観に加わり、現在の勝沼宿の景観となった。農家の建物は土間を作業場として使ったため、前土間と通り土間がそれぞれの機能をもつ点に特徴がある。観光ブドウ園の登場に伴い、主屋の曳家も

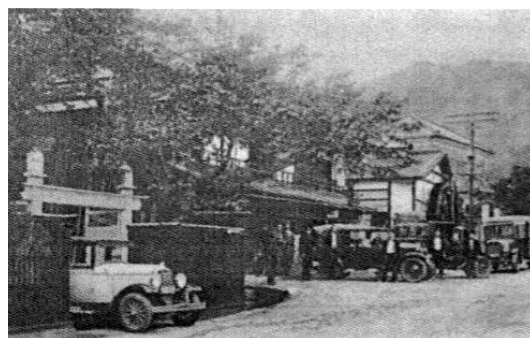


図 57 古寿園（昭和 3 年頃）

みられ、ブドウ棚や駐車場の設置より、街道からのアプローチを重視したことがわかる。また、旅籠の名残をとどめる伝統的な建造物（町家、土蔵）や農家の保存状況も良く、現代まで産業とともに受け継がれている。よって、宿場町とブドウ産業の盛衰を反映する勝沼宿の町並み・建築物は、歴史的な町並みの中にブドウに関する人々の活動が継続しているようすをよく表している。

（小林直弘・上田あゆみ）

註

- 1) 山梨県史料編纂会が収集した調査資料（1916）、「甲州道中宿村大概帳」
5（山梨県立博物館所蔵）などにおける勝沼宿の記述。
- 2) 勝沼町誌刊行委員会編（1962）『勝沼町誌』勝沼町、p.944。
- 3) 上野晴朗編（1973）「勝沼宿史料」『勝沼町史料集成』勝沼町。
- 4) 前掲註2文献、p.81。

第4節 勝沼地域の生活文化

1. 町場における商いの変遷

勝沼地域のなかでも甲州街道沿いは、江戸時代に宿場町として栄えて以降、地域経済の中心となってきた。とくに近代に商業町となってからはさまざまな商店が軒を連ね、観光客を対象とした観光ブドウ園と混在する空間が形成された。

ここでは、こうした店舗などの変遷について、諸史料を通じて整理することで、甲州街道沿いの空間の位置づけについて考察する。

(1) 江戸時代

勝沼宿が設けられる以前から、勝沼には市が設けられ、物の売り買いがおこなわれていた。このことについて、宝暦10年(1760)の「上岩崎村村鑑明細帳」¹⁾には以下のような記述があり、薪などの取引がおこなわれていたことがわかる。

一、金三拾 六両程薪代金、初鹿野村、日影村、深沢村、是ハ四ヶ村 二而薪山買申候而人馬二而作間二伐取申候其外勝沼村市 二而薪調申候

慶長年間(1596～1615)に甲州街道新宿－甲府間が設けられ、甲州街道の宿駅として勝沼宿が定められると、街道最大規模の宿場町として繁栄することとなる(表3)。「甲州道中宿村大概帳」²⁾によれば、その規模は本陣1ヶ所、脇本陣2ヶ所、旅籠23ヶ所(大5、中7、小11)と、旅籠数では横山宿、府中宿、中初狩宿、内藤新宿に次ぐ規模であった。

文政10年(1827)に竹野半兵衛によって刊行された『諸国道中商人鑑』³⁾では宿場ごとに旅籠などの案内が掲載されているが、勝沼宿についても3軒の旅籠が掲載されている(表4)。このうち2軒については身延山の講中宿として、また1軒については信州一ノ宮の講中宿である旨が記されている。その他、商人の定宿としての記載もみられ、江戸時代後期には多様な来訪者が勝沼宿に宿泊していたようすを伺うことができる。

(2) 明治時代

近代に宿場町が衰退すると、勝沼宿は商業町としての色彩を強めていった。そうしたなかで、例えば、上町、仲町を中心に田中銀行⁴⁾、萩原家

表3 甲州街道沿いの宿場町とその規模

	本陣	脇本陣	旅籠屋			
			大	中	小	合計
内藤新宿	1	0	12	0	12	24
下高井土宿	1	0	1	1	1	3
上高井戸宿	1	0	1	0	1	2
国領宿	0	0	0	0	1	1
下布田宿	0	0	0	3	0	3
上布田宿	0	0	0	0	1	1
下石原宿	0	0	0	0	0	0
上石原宿	0	0	0	4	0	4
府中宿	1	2	12	10	7	29
日野宿	1	1	5	8	7	20
横山宿	2	3以上	10	17	7	34
駒木野宿	1	1	12			12
小仏宿	0	0	11			11
小原宿	1	1	0	2	5	7
与瀬宿	1	0	0	4	2	6
吉野宿	1	1	1	2	0	3
関野宿	1	1	0	0	3	3
上野原宿	1	2	5	7	8	20
鶴川宿	1	2	3	3	2	8
野田尻宿	1	1	2	3	4	9
犬目宿	2	0	3	5	7	15
下鳥沢宿	1	2	3	3	4	10
上鳥沢宿						
猿橋宿						
駒橋宿						
大月宿						
下花咲宿						
上花咲宿						
下初狩宿						
中初狩宿						
白野宿						
阿弥陀海道宿						
黒野田宿						
駒飼宿						
鶴瀬宿						
勝沼宿						
栗原宿						
石和宿						
甲府柳町						
韭崎宿						
台ヶ原宿						
教来石宿						
葛木宿						
金沢宿						
上諏訪宿						

住宅（仲松屋）⁵⁾などが営まれることとなった。そして、こうした営みによって生まれた建造物が、近世に形成された街路（甲州街道）のうえに現在の家並みの基盤を形成したと捉えることができる。また、近世に脇本陣であった若尾家⁶⁾は、近代になると郵便局をおこないながらブドウ農家も営むなど、商業とブドウ業が混在していたようすがみられる。

この時代の商業の広がりを空間として捉えることは難しいが、明治17年（1884）に刊行された『甲斐道中各家商業便覧 全』⁷⁾には、勝沼宿について、商店（卸を含む）、宿、料理屋など26軒が記載されている（表5）。これらを通覧すると、宿（7）、魚乾物（3）太物（3）、砂糖（3）、料理屋（3）、荒物（2）、小間物（2）、灯油（2）、

菓子（2）、酒造（2）、畳表（2）⁸⁾などが含まれており、宿以外にもさまざまな商いが営まれていたことがわかる。

（3）大正時代

大正時代については、電話加入者の一覧から地域の商業のようすがわかる。

『山梨商工人名録』⁹⁾には、勝沼地域及びその周辺の電話加入者が表6のとおり掲載されている。時代背景を踏まえれば、これらの電話加入者は地域の有力事業者などであり、地域の商業を考えるうえでは重要である。

明治時代における勝沼宿周辺の商工業者と比較すると、ブドウ栽培やブドウ酒醸造に関連する事業者が多く登場しており、酒商、牛肉商、甘味製造販売などと兼業している事例もみられる。この

表4 『諸国道中商人鑑』（文政10年（1827））に掲載された勝沼宿の旅籠

	位 置	記 事
池田屋重蔵		江戸新軌持講中定宿（永代御花講中定宿） 江戸惣講中定宿（永代常経講中定宿）
鍵屋孫兵衛		江戸新軌持講中定宿（江戸惣講中定宿） 江戸千部講中定宿（江戸日野・八幡／中部商人定宿）
幾久屋利八	上町北側	諸国妙薬売弘所 御休泊 諸国商人衆定宿 信州一ノ宮代々講中定宿 小間物太物荒物志所く

表5 『甲斐道中各家商業便覧 全』（明治17年（1884））に掲載された勝沼宿の店舗

	業 種	備 考
福嶋屋 小池忠右衛門	諸国妙薬取次所 和漢西洋薬種 筆墨硯紙 繪具染草 石油灯油	
山本主人	太物唐物類 和漢洋薬種 諸国畳表類	
竹原田 萩原栄蔵		
天満屋清兵衛	太物唐物古着類 東京雪踏砂糖	
河内屋傳右衛門	灯油 瀬戸物 煙草	
池野屋武助	小間物 御伽羅之油	
鳶屋喜右衛門	穀鹽荒物 畳表 砂糖	
田中新右衛門	松魚節 砂糖類 茶乾物	
清水屋喜八	小間物袋物 舶来物数品	
中屋利助	魚乾物卸 諸国鯉節	
鶴田屋彦太郎	諸国商人御休泊 人力立場	富町
沢田屋富右衛門	魚乾物	富町
中屋勇二郎	魚乾物 諸国鯉節	
松風屋政右衛門	御菓子所 卸 高尾せんべい	
武蔵屋伊兵衛	御菓子所	仲町
吉澤縫右衛門	酒造 醤油酢	
池田屋幸造	諸国商人御定宿	
菊屋一造	諸講中御休泊	
大黒屋徳兵衛	太物荒物類	坂下
尾車寿し	寿司	仲町
鍵屋孫兵衛	穀商 諸国商人御休泊	
尾張屋助三郎	即席御料理 御休泊	
吉野屋海助	諸国商人御定宿	
鹽屋茂兵衛	即席御料理 御休泊	
老久屋霍吉	諸国商人御休泊	
坂本屋	諸国商人御休所 肉牛許宜 地造粗酒	

のち、ブドウ栽培・販売などが地域全体で本格的に展開される初期のあり方として重要である。

(4) 昭和時代（戦前）

昭和に入ると、昭和5年（1930）に『大日本職業別明細図』のひとつとして「東山梨郡 東八代郡」¹⁰⁾が刊行されており、甲州街道沿いの店舗などの分布が示されている。地図はデフォルメされているため縮尺などは正確ではないが、勝沼地域全体の地割が表現されている。また、裏面には職業別一覧として広告が掲載されており、勝沼地域での広告募集もおこなわれていた（図58）。

同図をもとに、店舗の種別ごとに整理したものが図59である。勝沼宿東側（上町・仲町周辺）には小売店などを中心に多くの商店が営まれているのに対し、西側及び等々力付近ではブドウ園な

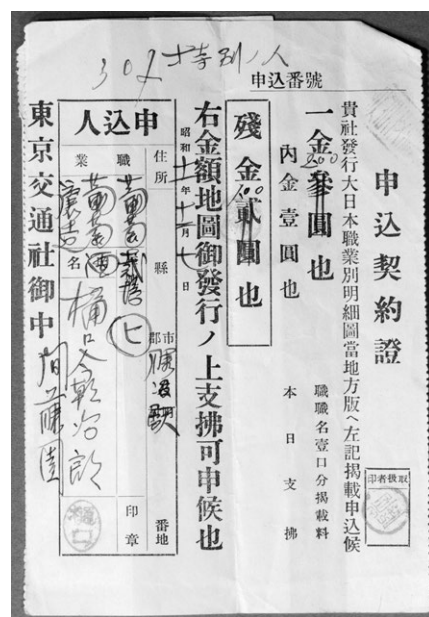


図58 大日本職業別明細図申込契約証

表6 『山梨商工人名録』（大正12年（1923））に掲載された電話加入者

電話 番号	業 種	備 考
0	勝沼郵便局	公衆通話用並 電報送託用
1		一般事務用
60		障碍試験用
2	古屋葡萄園	古屋壽作
3	日原石材店	日原勘作
4	小澤皆吉	農業
5	満屋 三枝傳次郎	製糸兼米穀肥料商
6	甲斐産商店 宮崎光太郎	葡萄酒醸造業
7	前田久作	製糸業
8	山下角次郎	製糸業
9	山梨田中銀行	銀行業
10	萩原平光	金貸業
11	勝沼運送店	
12	松風亭本店 佐藤政吉	菓子製造業
13	田中本店 田中董策	会社業
14	甲府電力株式会社相與出張所	
15	高野好太郎	土木請負業
16	田中慶重	農業
17	山梨銀行勝沼支店	
18	隆基館 小野滋	生糸製造業
19	金丸傳四郎	農業
20	御手洗權平	質屋兼古着商
21甲	有限責任勝沼葡萄販売購買 信用組合	
21乙	飯田屋茶店 飯田恒吉	茶雑貨商
22	雨宮留吉	製糸業
23	平塚商店 平塚金左衛門	米穀肥料商
24	コイケ商店 小池徳太郎	雑貨書籍業
25	橋田屋 橋田伸太郎	雑貨商
26	早早文太郎	蚕種業
27	小澤嘉六	製糸業
28	三森金物店 三森清治	金物雑貨商
29	保坂商店 保坂義信	魚乾物商
30	有限責任岩崎葡萄販売信用組合	
31	中屋商店 佐久間和七	海陸産物商
32	川崎商店 川崎善次郎	葡萄酒醸造業
33	美津屋 津島わき	料理業
34	甲府電力株式会社等々力出張所	
35	雨宮作左衛門	農業
36	山口榮蔵	肥料商
37	三澤商店 三澤長太郎	肥料商
38	甲信社 早川貫一	製糸業
39	〇〇眞策	農業
40	天野本店 天野行通	茶、紙、蚕具及び 印刷業
41	奈賀屋呉服店 田中忠兵衛	呉服太物商
42	勝沼町外一箇村組合役場	
43	野田商店 野田康榮	ブドウ栽培兼酒商
44	丸勝山中運送店	
45	岩崎製糸株式会社	
46	鈴木富作	農業
47	坂本久太郎	金貸業
48	田中分店 田中保吉	呉服太物商
49	河野商店 河野幸太郎	米穀雑貨商
50	鈴木宇吉	糸繭商
51	秋山要	製糸業
52	萬年屋 坂本嘉幸	米穀肥料酒類商
53	三井増平	郵便局長
54	吉田米重	医師
55	古屋義甫	理髪業
56	萩原忠吉	ブドウ栽培兼牛肉 商
57	田中俊三	銀行員
58	勝沼葡萄酒株式会社	葡萄酒醸造並びに 甘味製造販売
59	喜月堂 矢崎喜久一	国産菓子製造販売舗
61	池田濱吉	葡萄酒醸造業
82	宮崎利十郎	製糸業
63	福島屋薬局 佐野俊	薬種商薬剤師

※電話番号39の一部文字については、史料不鮮明により不明である。

どが多く立地している。このことについて、第1節で指摘したように東側のエリアでは街道南側では段丘崖が迫っていることから敷地の奥行が狭く、大規模なブドウ栽培に適しておらず、西側のエリアでは敷地背後にもブドウ畑を設けることができたという土地条件も影響しているのかもしれない。

また、現在の中央葡萄酒株式会社は「三澤百貨商厦」、麻屋葡萄酒株式会社は「麻屋酒類雜貨店」

となっており、現在ワイナリーが営まれている場所
で醸造以外の小売業が商売の中心となっていた
ことがわかる。

また、岩崎など、甲州街道周辺を除いた地域の商工業者を示す史料として、『大日本職業別明細図』「東山梨郡 東八代郡」¹¹⁾(昭和9年=1934刊)がある(図60)。ここからは、甲州街道沿い以外の地区ではほぼすべてがブドウ栽培・出荷に関連



図 59 大日本職業別明細図第 191 號「東山梨郡 東八代郡」(部分/昭和 5 年(1930))と職業構成

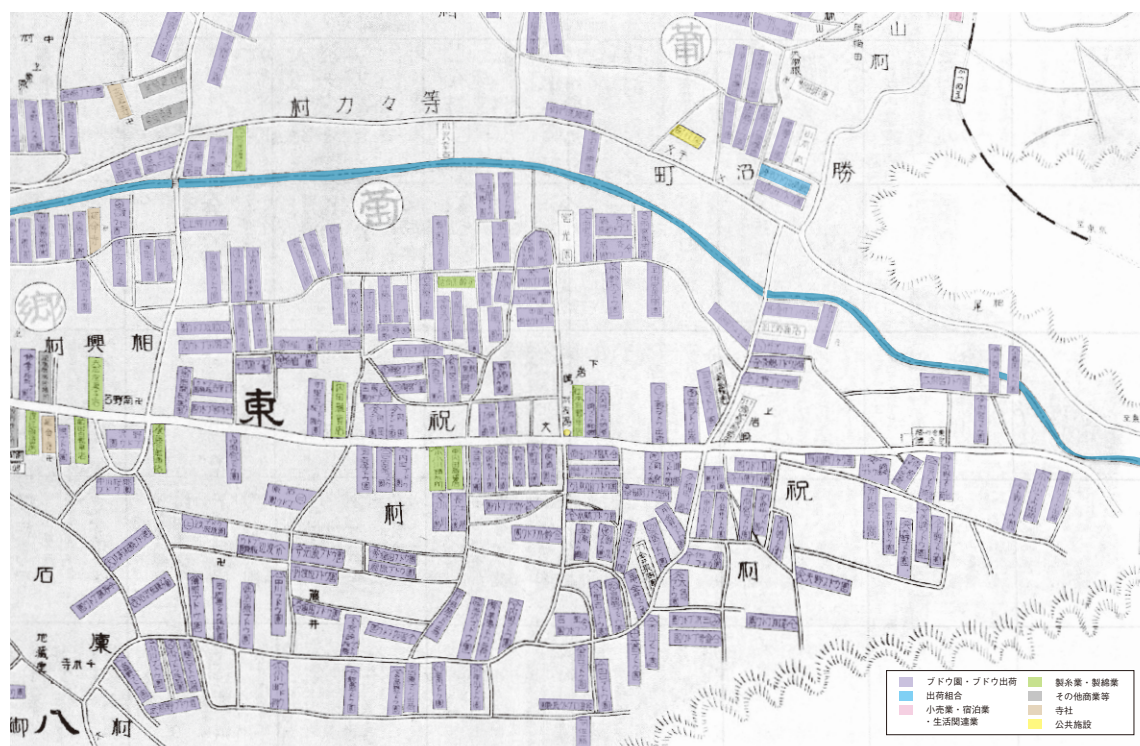


図 60 大日本職業別明細図第 382 號「東山梨郡 東八代郡」(部分／昭和 9 年 (1934)) と職業構成

する事業者であり、甲州街道沿いとはまったく異なる様相にあった。ここに勝沼地域における町場の性格をもった地区と農村的性格をもった地区の補完的關係をみてとることができる。

なお、『山梨縣電話番号簿（昭和13年（1938）7月1日現在）』¹²⁾掲載の「勝沼局電話加入者名及番號」について、記載されている所在地と業種をもとに整理したものが表7である。当時の勝沼町の電話加入者は製造・小売店など及び「ブドウ栽培(出荷)業」が他の旧町村に比して顕著であり、銀行なども複数存在していた。他方で当時の祝村では「製糸業」などが多くみられる。すでにあげたこれと同時期に刊行された大日本職業別明細図では、岩崎にも多くのブドウ農家が掲載されていた。そのことを踏まえると、勝沼の「ブドウ栽培

(出荷)業」は積極的に電話に加入していたと考えることができ、その背景には、栽培から販売までを担う商業的性格が強い農業経営をおこなっており、またそれを可能にする販売環境や資金力などが存在していたと推測することができる。その点からも、岩崎と勝沼の地域の性格的な違いを見出すことができる。

(5) 昭和時代（戦後）以降

『勝沼町誌』に昭和35年（1960）の勝沼宿東側（上町・仲町周辺）の商工業の分布及び周辺地区と比較した構成の比較が記録されている¹³⁾（図61）。これらによれば、昭和13年（1938）と同様にさまざまな商品を扱う小売店などが勝沼に集中して分布していたことがわかる。そして、特に勝沼宿東側ではそうした店舗などが集中して立地しており、そうした点は少なくとも昭和のはじめから一貫していると理解することができる。

2. 古写真にみる 勝沼の生活文化

大正時代になると、勝沼地域は写真に記録されるようになる。被写体は、人物、橋梁、町並み、駅・電車、ブドウ畑、農作業風景、冠婚葬祭や祭事などのようすなど多岐にわたり、いずれもこの地域の日常を捉えたものとして興味深い。

ここでは、勝沼宿を中心とした甲州街道沿いを撮影したいくつかの古写真をとりあげることで、近代における勝沼のようすを捉えたい。

図62は、大正天皇の御大典記念行事のようすである。背景に街道に面して商家と蔵が並んでいる。すでに本節前半でみたように、勝沼宿の宿場町としての機能は明治時代には失われ、商業町へと変化していった。しかし、町の機能が変化する

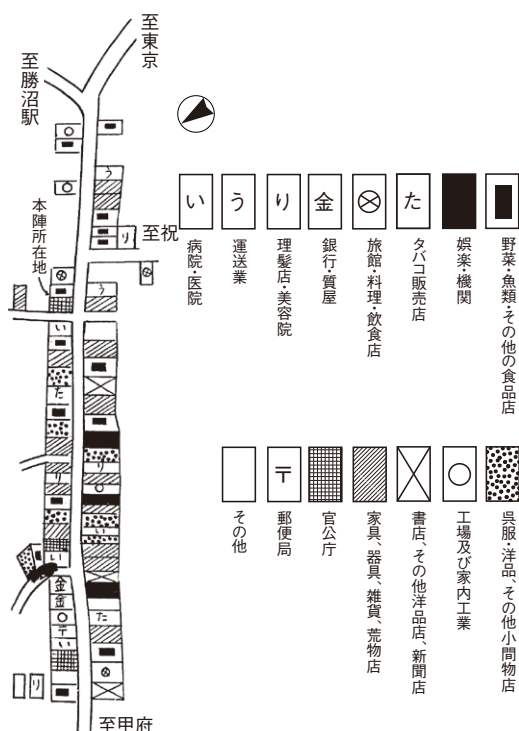


図61 昭和35年（1960）の家並み（上町、仲町）

表7 『山梨縣電話番号簿』（昭和13年（1938））にみる職業構成

	勝沼町	祝村	等々力村	菱山村	小佐手村	休息村	錦塚村	相與村	日川村
ブドウ栽培（出荷）業	8	3	0	0	1	0	0	0	0
葡萄酒醸造業	0	2	0	0	0	0	0	0	0
製糸業	2	7	2	0	0	0	0	2	0
官公署・各種団体・病院・銀行・営業所	9	3	2	4	0	2	0	3	0
その他	38	1	5	0	1	0	3	3	1
記載なし	2	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	62	16	9	4	1※	1	3	8	1

※重複あり

なかでも、主屋と土蔵が接道するという空間構成が継承されていることは第3節で指摘されたとおりである。宿場町であった勝沼宿が商業町へと転換しても栄えることができた背景には、近世から一貫して果樹農業が地域の基幹的産業として存在していたことによるのかもしれない。

図63は明治6年(1873)に開校した勝沼学校である。校舎は明治13年(1880)5月に着工した擬洋建築の藤村式建築であり、現在の甲州市立勝沼小学校の場所に位置していた。同年の明治天皇巡幸の際には、行在所として使用された。工事経費には地元(勝沼村・深沢組、等々力村、小佐手村)の献金も多く使用されており、当時の教育に対するこうした地域の情熱をみてとることができる。なお、明治9年(1876)に竣工した祝学校も藤村式建築による校舎であった。

さて、観光ブドウ園は戦前にいくつかが開園し、戦後のモータリゼーションの進展とともに急増していった(第5章第2節参照)。図64は、戦後(昭和30年代)の甲州街道を写したものである。売り子と思われる女性がブドウをもっている。後方

の電柱には戦前に開園した観光ブドウ園「玉翠園」の看板がみえる。このように、戦後の甲州街道の写真には、さまざまな観光ブドウ園の看板などが写り込むようになる。

図65は、昭和17年(1942)に東京都立川市から来園した観光客によって撮影された。主屋の縁側でブドウの籠づめをしている勝沼地域の日常風景は、当時多くの観光客の目を引き付けた。

戦後、昭和33年(1958)に新笹子トンネル(新笹子隧道)が開通すると、勝沼地域の観光は急速に拡大した。甲州街道には多くのバスや自家用車が溢れ、通りにはしばしば渋滞なども生じたという(図66・67)。昭和52年(1977)に勝沼バイパスが開通すると、甲州街道の交通量は減少したが、現在でも夏から秋にかけての観光シーズンには多くの自家用車及び観光バスが通過している。

交通インフラの整備とともに、日本経済の成長も相まって、ブドウの出荷量は年々増加し、出荷方法も多角化していった。図68は、旧国鉄の臨時小荷物取扱所のようなすである。昭和38年(1963)から勝沼駅から出張し、勝沼町役場前で10月に



図62 主屋と蔵が軒を連ねる勝沼宿の町並み(大正4年)



図63 町の中心にあった勝沼学校(昭和10年頃)

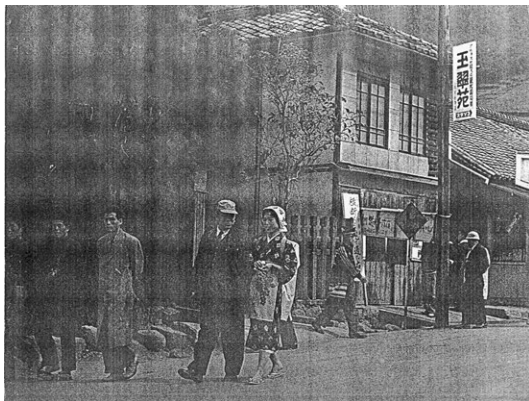


図64 玉翠園(観光ブドウ園)の電柱看板(昭和30年頃)

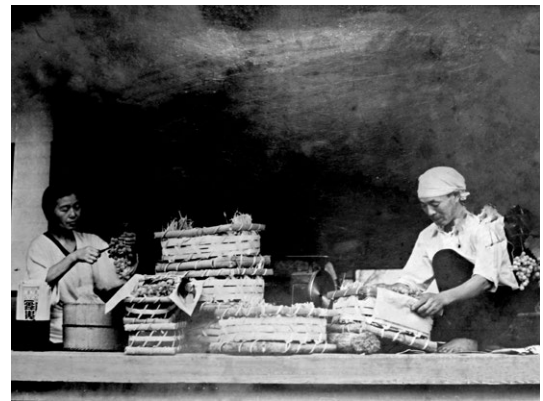


図65 縁側でのブドウの籠づめ(昭和17年)

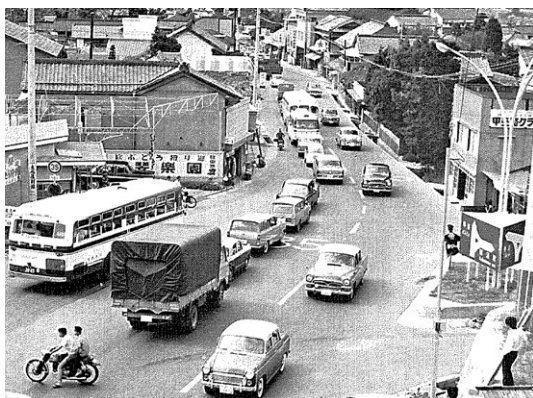


図 66 新笹子隧道開通後の町の賑わい（昭和 30 年代）



図 68 臨時小荷物取扱所のようす（昭和 30 年代末）

開設されていた。取扱量は 500 件を超える日もあったという。駅以外に出張して荷物を受け付けるという国鉄による取り扱いは全国でも例がなかったといい、勝沼地域におけるブドウ出荷の変遷を考えるうえで重要な資料である。

近世の宿場町からはじまり、明治時代以降は商業町として発展した。さらに戦後には観光地化も進み、現在に至っている。そうしたなかで、地域の内外とのひと・物・文化の往来を支え、その中心であった町場が担った役割は、ブドウ栽培・ワイン醸造を中心とした勝沼地域全体を考えるうえでも大きいといえる。（菊地淑人）

註

- 1) 山梨県立博物館所蔵。
- 2) 児玉幸多校訂（1972）『甲州道中宿村大概帳』『近世交通史料集』6、吉川弘文館。
- 3) 竹野半兵衛（1827）『諸国道中商人鑑』花屋久二郎（山梨県立博物館（甲州文庫）所蔵）。
- 4) 現在の旧田中銀行博物館。
- 5) 金融業などで栄えた。
- 6) 現在は若尾果樹園（観光農園）、マルサン葡萄酒を営む。

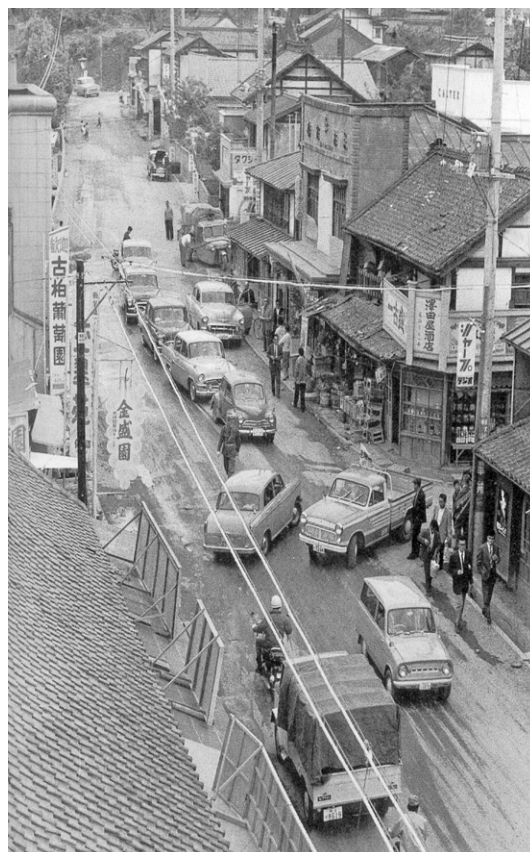


図 67 観光客で賑わう上町付近（昭和 30 年頃）

- 7) 大塚宗七（1884）『甲州道中各家商業便覧 全』（国立国会図書館所蔵）
- 8) 一部で店舗が重複している。
- 9) 保坂計蔵（1923）『勝沼特設電話加入者名及番號』『山梨商工人名録』山梨商工人名録刊行会、pp.310-312。
- 10) 東京交通社（1930）『東山梨郡 東八代郡』『大日本職業別明細図』第 191 號、東京交通社（国立国会図書館所蔵）。
- 11) 東京交通社（1934）『東山梨郡 東八代郡』『大日本職業別明細図』第 382 號、東京交通社（国立国会図書館所蔵）。
- 12) 甲府郵便局編（1938）『山梨縣電話番号簿（昭和 13 年 7 月 1 日現在）』。
- 13) 勝沼町誌刊行委員会編（1962）『勝沼町誌』勝沼町、p.580、586。

[コラム] 校歌にみる景観認知 ― ブドウに関する描写の出現

校歌の歌詞と地域の景観イメージの関係性についてはすでにいくつかの既往研究が存在する。例えば、全国の地方中都市を対象とした分析から、校歌の歌詞における多くの要素が地域全体の景観イメージの中心となり、各地の地域の景観に対するアイデンティティを表す景観要素が出現することがすでに示されている¹⁾。

ここでは、勝沼地域に所在する小学校4校、中学校1校²⁾を対象に、校歌の歌詞にみられるブドウに関する表現と作詞年代の関係についてみていきたい。

勝沼地域の小中学校5校における現在の校歌のなかで、作詞年代がもっとも古いのは祝小学校である。大正13年(1924)に制定された歌詞にはブドウに関する語はみられない。

昭和29年(1954)には勝沼小学校の校歌が制定される。この時期は山側を含めた地域全体にブドウ畑が拡大し、一面のブドウ畑とされる景観が成立する時期である(図13参照)。そうした地域景観が形成されるなかで、「つぶらなぶどう 実

るよう」とブドウを描写した歌詞がつけられていることは興味深い。

また、昭和30年(1955)には東雲小学校、菱山小学校、勝沼中学校の校歌が制定される。東雲小学校の校歌では「みのる真玉」「えびかずら」、菱山小学校では「葡萄郷」、勝沼中学校では「つぶらなる ぶどうの影」という歌詞が歌われている。

したがって、ブドウ畑の拡大、あるいはブドウ郷としての勝沼イメージの形成とともに、地域の景観イメージとして校歌にもブドウの表現が出現したと考えることができる。(菊地淑人)

註

1) 矢部恒彦ほか「小学校校歌に謳われた全国の地域景観イメージに関する研究」『日本建築学会計画系論文集』60(472)、1995年、pp.111-122。

2) 甲州市立勝沼小学校、祝小学校、東雲小学校、菱山小学校及び甲州市立勝沼中学校。

参考文献

佐田喜長編(2003)『山梨県公立小中学校校歌集』

甲州市立勝沼小学校 校歌

横瀬 源一 作詞
林 光 作曲
(昭和29年3月制定)
(昭和48年10月編曲)

- 一、 朝空 朝空 柏尾山
ともに仰いで 胸はって
きれいな花の ひらくよう
日ごと明るく まなぼうよ
楽し 勝沼小学校
- 二、 清らな 清らな 日川に
心みがいて 美しく
つぶらなぶどう 実るよう
力を合わせて はげもうよ
みんなの 勝沼小学校
- 三、 平和の 平和の にじの下
あすをになって 元気よく
み空をはとの かけるよう
希望を高く すすもうよ
伸びゆく 勝沼小学校

甲州市立祝小学校 校歌

石原 盛平 作詞
三柵 謙一 作曲
(大正13年5月制定)

- 一、 みどり色こき ^{はちじょう} 蜂城の
すがたをおのが 鏡にて
めぐみのつゆの いとしげく
育つわれらぞ 幸ふかき
- 二、 この土に生まれ この光榮に
はぐくまれゆく わが友よ
道をはげまん 日川の
末の流れも よどまじと

甲州市立東雲小学校 校歌

河村 義昌 作詞
小池 寿郷 作曲
(昭和30年12月制定)

- 一、 明ける山なみ 空あかね
桜なみ木に 輝やけば
文化の花の さくところ
希望にみちて ほほもえて
集う東雲^{しのめ} 我等の学園
- 二、 みのる真玉に 風かおる
ゆかりの里の えびかずら
祈りの鐘の 鳴るところ
少年の夢 清らかに
学ぶ東雲 たのしい学園
- 三、 光さやかな 高原に
白根の峯を 遠くみて
平和の雲の ゆくところ
愛と誠の ひとすじに
進む東雲 はえある学園

甲州市立菱山小学校 校歌

米山 愛紫 作詞
山口 保治 作曲
(昭和30年9月制定)

- 一、 春秋姿 うるわしく
窓にほほえむ 宮宕山^{みやこやま}
ふもとなごむ 葡萄郷
心を合わせて 楽しく学ぶ
- 二、 大滝川の せせらぎに
明日へ花咲く 夢のせて
正しく強く ほがらかに
希望にもえて 力をみがく
- 三、 歴史にはえる 学び舎は
丘にそびえて 風さやか
菱山校よ わが友よ
伸びゆけ若木 輝けわれら

甲州市立勝沼中学校 校歌

米山 愛紫 作詞
森 義八郎 作曲
(昭和30年3月制定)

- 一、 柏尾山^{かしお} 開けゆくところ
ほのぼのと 朝日に映えて
さざめきの あふるるあした
学び舎は つねに愉しく
ふるい立つ 若人われら
- 二、 湊谷^{みなや}の 水澄むところ
つぶらなる ぶどうの影に
勤労の歌 湧くまひる
学び舎は つねに愉しく
集い寄る 若人われら
- 三、 駒白根 遥けきところ
夕星の 妙なる光
讃えつつ 幸よぶ夕べ
学び舎は つねに愉しく
睦み合う 若人われら

うたえ 勝沼中学校